

山内清男の『日本先史土器の縄紋』と塚田 光

武井 則道

本論にはいる前につぎのことをお断りしておきます。この文の中で出てこられる方がたは先学であったり、先輩であったり、同世代であったり。後進であったりします。本来はそれなりの敬称でのべなければなりません。ここではすべての敬称を省かせていただきました。お許しを乞う次第であります。

1 山内清男の日本先史土器における縄紋研究

a 縄紋原体の発見以前の研究

山内は縄紋の原体の発見以前は縄紋土器にみられる縄紋の理学的な目での観察をおこなっていた。

「磐城国三貫地貝塚発見の土器の撚糸紋」では福島県三貫地貝塚出土の土器にみられる撚糸紋を検討している。その結果、「網様交叉撚糸紋の糸は二子撚であって、例外として横糸は緩く撚られ、縦糸には撚っていない二本の糸（繊維束）の用いられたものがある。同一破片でも糸に太いものと細いものがあり、同じ糸でも太さが平等でないものもあるが概してよく揃って居る。糸の撚り方には右撚りと左撚りと両方ある」としている（山内 1925）。

縄紋土器の斜行縄紋の観察をして「斜行縄紋に関する二三の観察」を書いている。その結果は、つぎのようなものである。

「一、斜縄紋の共通性状を挙げ、条及び節の特徴によって、これを単節、複節、無節、異節及び異条の五種に分類した。

二、単節、無節、複節の三種は、同一組織によるらしく、夫々撚られた繊維束、撚られない繊維束、撚糸を原料とするため、節の性状を異にして居るものと推定した。

三、単節及び複節斜縄紋では、原料の繊維束に右撚り左撚りの二種があり、これが、条、節、等の性状を支配するらしいことを想像し、両縄紋を根本的に二種に分けた。

四、各種縄紋の押捺の方位（縦位及び横位）を規定した。そして型式について両者の消長を表示し、縦位押捺盛行が縄紋式土器系列の中期に限られることを指摘した。

五、複節及び異条斜縄紋の諸型式に於る存否を明にし、年代的意味ある事を述べた。

六、縄紋の末端及び結束線が横位に走ることを述べ、併せて、結束線を有する型式を列挙した。

七、縄紋の最も普通な押捺方法について所見を述べ、次に帯状縄紋の手法を細説した。後者の盛行する型式を新旧二群に大別した。

八、本篇は縄紋の調査が型式制定又は同定に役立ち得ることを示すことを主眼とし、原体の組織形態如何に関しては深く論及しなかった」（山内 1930）。

山内は松本彦七郎の日本石器時代土器の縄紋の研究について触れていないが、筆者は気にしていたことは確かであるので、紹介しておく。

松本彦七郎の縄紋についての見解

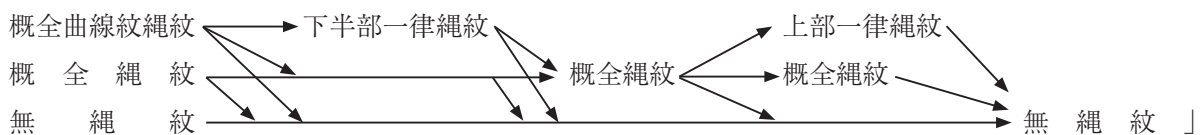
松本は石器時代土器の縄紋についてつぎのように述べている。

「縄紋の上方發展と上方退却とその消失

縄紋の上方發展には先づ特別に例證を擧ぐる迄もなく曲線模様の上退却及その消失の條を見られな
b 釋然たるべし。曲線模様の上退却を追ひつつ一律縄紋が上方に發展する（下限は動かず上限が上進
す）なり。然る時に胴の概全面に縄紋あるが如きものはその儘原的なりとは限らず、少なくとも其中に
は第二次的に茲に到れるものある事明なり。宮戸島に於てさるものが特に甚だ多きが如きは就中然り。

然らば胴の概全面に縄紋があるが如きものは凡て第二次的のものなりや。或は然らむを測りに難けれ
ども、必ずしも然りとは断定し得ず。凸縄紋アイヌ式土器と伴ひても発見せらるゝを以て、古くよりも
多少存在せりし事は明なり。此處迄は瀬澤及宮戸島材料が示す時期迄に見らるゝ變遷なり。併し是にて
終れるには非ず。越中国大境白山社洞窟介塚第五層には胴の上部に縄紋ある土器が多しとの事なり。河
内國々府遺跡よりもさるものが少數に発見せらる。こは縄紋が下方より減退しつゝ、茲に到れるものなる
べく、縄紋としては既に末期に近づけるなり。更に大境第四層及以上の層には最早縄紋なき土器のみを
見るとの事なり。

然らば無縄紋土器はこの順序を踏みてのみ起りたるか。勿論必ずしも然らず。曲線模様のそれぐの時
期にあるものに亘りて縄紋無きものを見るべく、そは又縄紋のそれぞれの時期に亘りて縄紋の突然消失
する事あるを示すものなり。無縄紋土器も甚だ古くより既に多少存在せし事明なり、今縄紋の發展、減
退、消失等を表に示せば左記の如かるべし。



松本は石器時代土器の縄紋の型式分類と変遷から系統發達・進化を考えていたようである。これは山内も
期待したが、学位論文にあるようにそのような縄紋の系統發達・進化は認められなかった。山内が「煙草の
けむりのようなもの」とっていたようである。

b 縄紋の原体とその回転押捺法の発見

山内清男は日本先史土器の縄紋の原体が縄であり、それを回転押捺した事実の発見の経緯について自分自
身では明快に語っていない。ほかの研究者による証言を検討したい。

証言 1 甲野 勇『縄文土器のはなし』（甲野 1957）

「 「とうとう縄文の正体をつきとめたよ」

これが山内氏の最初の言葉でした。そしてポケットからひと握りの油土と、一本の撚紐をとり出しま
した。それから机のうえに平らにのぼし、そのうえに撚紐をのせ、これを手のひらで軽くおさえながら
前の方に動かすと、紐がころがり動いて油土のうえ、くっきりとつけた跡がまがうかたなき縄文でし

た。

考えが壁にぶつかたように動けなくなっていた私は、これを見て、全く奇蹟としか思われませんでした。ウーンとうなっている私に、山内氏は、この発見の動機を話してくれました。いつも気になって、頭からはなれない縄文の謎を解こうと、山内さんは、その日も研究室の片すみで、油土の塊りを手に、土器に現れた、いろいろな縄文の型とって調べてみました。さすがに、ちょっと疲れたのでしょう。山内さんは、煙草に火をつけて、ゆっくり吸いながら、なにげなく側らにころがっていた螺旋をとりあげこれを油土表面に手のひらで転がしたのです。

こんな時でも、山内さんの目は、平らにのばされた油土の表面に、連続して印された線あとを見逃しませんでした。はっとして螺旋をしらべると、ぐるぐる曲がっている線と、油土に残された平行線とは全く一致していました。これだとばかり、こんどはよった撚紐を、同様に押ししてみたところが、そこにまごうかたなき縄文が現れたのです。この発見に力をえた山内さんは、そこでこんどは、鉛筆のまわりに格子目や鋸の のようなギザギザの文様を彫刻して、これを油土の上のころがして見たところが縄文式土器の仲間、押型文土器と呼ばれるものに特有の、格子目文様や鋸歯状文様が現れたのです。

ここまで解れば、もうしめたものです。紐のより方を次々に変えて、いろいろ工夫したあげく、そのころ知られていた、ほとんどすべての縄文を日ならずして再現することに成功したのです」(甲野 1953)。

証言 2 山内清男「斜行縄紋の本態」の序言

「最近予は中居貝塚の土器の縄紋に関して最終的観察を試みつつあつたが、5月 日漸く斜縄紋の生成機転を明にすることが出来た。机上にあつた縄を粘土上に回転しつつ押捺したところが偶然斜縄紋が出来あがつたのである。末端線、結束線等も亦この縄の末端及び結束によつて生じ、各種条は撚糸の撚りによつて生じることも亦直ちに実験することが出来た。尚この回転押捺の原理を諸種の撚糸文にも応用しうるのである。かくて所謂縄紋の大多数は、そのまま原体の押捺ではなく、縄又は縄を巻き付け又は組んだものの押捺と解することが出来るようになった。」

証言 3 伊東信雄の「回想 仙台の考古学」での発言

「縄文施文法の発見

山内氏はどういう具合にしてそれを見つけたか。山内氏は当時医学部の解剖学教室の助手をしていましたから、そばにはいろいろな医者 of 道具があるわけです。

ある日綿棒という、よく耳鼻科にいくと耳を掃除したり鼻を掃除したりするあの、脱脂綿を付ける細い金属の棒がありますが、あの棒をゴム粘土の上に回しました。そうすると綿棒の先は綿がはずれないように螺旋になっておる、その棒の螺旋部分をゴム粘土の上で回転してみると何だか縄文に似たような文様ができる。ちょうど縄をころがしたような文様になる。そこで目の前にあつた窓のカーテンの房の紐を粘土に転がしてみた。そうすると縄文と全く同じものができた。そこでこれは縄をころがして付けたものでないか、そう気が付いて、それから、麻を買ってきて、一生懸命になっていろいろの縄をこしらえた。それをゴム粘土の上で転がしてみる。その撚り方によっていろいろな縄文が出てくる。縄文の違いはみな縄の撚り方の違いによるもので、縄の撚り方によるものであるということがわかったのであります。

それでいろいろな全国の縄文の例を集めて、この縄文は一体どういう撚り方によって作ったかということを手自ら実験してほとんど成功したのであります」(伊東 1982)。

山内清男の日本先史土器の縄文の原体とその押捺方法の発見のいきさつはつぎのように推察される。

1931(昭和6)年5月 日のことであった。場所は東北帝国大学医学部解剖学教室の副手山内の部屋であった。いつものように縄紋式土器の縄文の研究をすすめていた。土器にほどこされた縄文を油粘土で写しとっていたという。疲れたので一服しながら油粘土の上に螺旋、つまりコイルをころがしてみた。螺旋は炎症ではれた咽頭にルゴール液を塗布する医療器具の部品の一つであった。油粘土の上には斜めに平行する沈線が押されていた。縄紋土器の縄文にみられる斜めの条と同じであることに山内は気づいた。撚り紐を油粘土にころがすと縄紋土器の縄文と同じものがあらわれた。縄文の原体とその押捺方法の発見である。そこで、当時縄紋土器の縄文の種類が豊富で変化に富んでいた青森県是川中居遺跡の1926(昭和元)年4月に発掘した土器資料の縄文の研究に従事した。甲野 勇 の証言は発見からあまり時間がたっていない時のものと思われる。伊東信雄の証言も発見からかなり近いと思われるが、詳しい時期についてはふれていない。第二高等学校、東北帝国大学文科大学国史教室の学生であった時とみられる。山内清男の発掘調査を手伝っていた頃と推測している。

この日本先史土器の縄文原体の発見とその押捺方法についてのことはそれ以降でもきちんと説明していない。いろいろなことを説明しなければならないために面倒くさいと思い、詳しく話すのをやめてしまったとみられる。

c 日本先史土器の縄文の本格的な研究

山内は縄紋式土器の縄文の原体とその押捺方法を発見した時に「縄文の本態に就いて(豫報)」を発表しようと20字—10行で縦書きの岡書院原稿用紙に31枚書いている。結局発表はされなかった。

1931(昭和6)年に「斜行縄文の本態」という原稿を書いている。それによると「私は近頃陸奥中居貝塚の土器の縄文に関して最後の観察に従事して居つた」といい、先にしめした縄文原体発見の経緯をのべている。「机上にあった縄を粘土上に回転しつつ押捺したところが偶然斜縄文が出来上つたのである」と。21.9 cm × 28.0 cm の原稿箋に縦書きである。84枚を確認している。

山内が「私は縄文の原体とその回轉圧痕についての研究は昭和8、9年頃完成に近い状態になった。そして、草稿、図版を揃えて居た。」と述べ、「Monographとして出版」しようと考えていた草稿がある。MARUZEN IXという20字20行 横書きの科学用箋に書かれている。これらが学位請求論文の執筆のもとになったと現在は考えている。

2 山内清男の学位請求論文『日本先史土器の縄文』

a 学位請求論文執筆の動機 梅原末治の忠告

山内清男は梅原末治に対し、尊敬し、敬愛し、いわれたことをすなおに聞く姿勢で接していたという。

塚田 光は山内が用事で柏屋印刷所をおとずれた時に、梅原末治に電話をしなければならないと取り次いだことがあったという。その話し方が親しそくに節度をもって話されていたとのべたことがある。

このような山内清男と梅原末治との人間関係はいつ頃からはじまったのであろうか。

中村五郎にうかがったところ、次のようなことであった。

山内清男と梅原末治の対面は1930（昭和5）年12月25日～31日においてであったと推測されておられる。山内は12月25日に京都でひらかれた京都人類学会に須田昭義と出席している。そして、12月29日から31日まで京都帝国大学文学部考古学教室の所蔵している縄紋土器資料の見学・調査をおこなっている。梅原末治がみずから対応したと推測されている。

この中村の推測は三森定男の「考古太平記」をみると、山内と梅原が対面していないことが分かる。この時に、山内が梅原末治に対してもっていた人間関係が成り立つたとは考えにくい。

証言 1

東北大学への博士蒐集図書への寄贈がある。その理由は同大学付属図書館編『梅原文庫目録』にあるが、しかし、博士本人によると、当時の梅原青年は任官せず文部省在外研究員の資格はなかった。そこで東北大学で博士に助手の身分を与え（文学部中村善太郎教授の許で）たが、最終的には大正14年末、博士は京都大学助手に任官して、セイス、ペトリ一両教授から考古学研究の指導を受けるために留学する。40数年後、この事に強く恩義を感じ謝意を表して、収集した文献のうち考古学・博物館関係の洋書の大半を東北大学に寄贈した。（渡辺 1982）

証言 2

「大正の末年、仙台の東北帝国大学に法文学部が開設されることになり、これに伴う考古学担当の教官として梅原が赴任することが内定したのである。この東北大学赴任は結局実現しなかった」（穴澤 1982）。

「予定された梅原の東北大学赴任に先立って、二年半に及ぶ梅原の洋行が内藤（湖南一筆者）によって企画された。当時官学の教員は一度は「洋行」して経歴にハクをつけるのが慣習であり、学歴も地位も資産もない三二歳の青年梅原の長い洋行が企てられたのは、東北大学赴任が前提になっていたからであろう。この洋行は、彼に先立って欧州を旅行してきた内藤が、朝鮮総督府総督であり梅原の発掘を援助していた齊藤実や関西の富豪から資金を集めて実現に漕ぎつけた。幸い、まだ昭和の大恐慌の前で好況のため円の価値は高く、旅行に有利だった。出発前に梅原の針金のような肉体が耐えられるかという健康診断から始まって、西洋料理のマナーまで特訓が行われた。」

「内藤は出発前梅原に、大学で正規の考古学の教育を受けていないのだから、その分を外国で習得してくること、そして考古学で彼独自の専門分野をつくることを、繰り返し言い含めた」（穴澤 1982）。

つまり、これらの証言から内藤湖南らが梅原の東北帝国大学に任官さす働きかけをして、欧米の留学をさすことになっていた。このために、梅原末治が東北帝国大学に行き来していたとみられる。この時に、医学部にいた山内清男とあった可能性がある。梅原は山内の仕事を理解し、援助をするようになったとみられる。

梅原末治は山内に縄紋研究で学位を取るようになり前から薦めていたようである。

ことに、山内が1962（昭和37）年3月に東京大学理学部人類学教室の非常勤講師を定年退職することになった。梅原は山内の再就職にあたって博士号を取っておいたほうが良いということからしきりに学位請求論文を書いて出すように進言したという。山内は私淑する梅原末治の忠告に耳を傾けたようである。これを受け入れて1931（昭和36）年3月31日締切の旧制学位請求論文を提出する決心をしたのである。この決断

はおそくとも 1960（昭和 35）年 1 月のことと推測する。

b 『日本先史土器の縄紋』の執筆

山内は学位請求論文の『日本先史土器の縄紋』の執筆に際して内容について、かつて書いたモノグラフ用の原稿と同等な内容のものにしたようである。塚田 光から山内の学位論文の刊行に手伝うようにいわれ山内の日本先史土器の縄紋の研究の草稿類を渡されたものの中には学位請求論文に関わるものは、編集作業中のために、筆者の手元にはなかった。今回この稿を起こすために検討した結果、上にのべたような見解に達した。（参考資料 1）

山内は学位請求論文の本文の下書きを 1960（昭和 35）年初めに書き始めたと思われる。そして、並行してその下書きをパピルス用の原稿用紙 20 字×15 行に清書してもらっている。これは人類学教室に出入りしていた、例えば御茶の水女子大学などの女子学生に依頼したと思われる。それは旧漢字で書かれている原稿をそのまま綺麗な字で清書しているからである。252 枚ある。これを底本として山内が加除・訂正、そして図版などの指示をおこなっている。つぎに図版の作成である。

模型写真	1—35、
前篇 縄紋原体の変化	附図 1—61（38—99）、
後篇 縄紋の総合的研究 1 繊維工芸としての縄	
2 装飾としての回転縄紋	
3 縄紋と紋様	62—108（100—150）

後篇 縄紋の総合的研究 4 最古縄紋土器に於ける縄紋 109—124（151—166）などである。

前篇 縄紋原体の変化は山内が発掘した青森県是川中居遺跡出土の縄紋土器の破片である。3 つの図版の束があった。

c 『日本先史土器の縄紋』の清書と図版作成

山内の『日本先史土器の縄紋』の原稿と図版は 1960（昭和 35）年の 12 月に出来ていたのであろう。原稿の清書は早ければ 12 月に始めたと思われる。

原稿は底本をもとに佐藤達夫が提出用の仕上げをしたものを佐藤静江と佐藤夫人の知り合いの早稲田大学第一文学部国史専攻の学生大石忠雄がさらに清書するという作業であったと思われる。図版は山内の助手をしていた磯崎正彦が模型写真以外のすべてを紙焼きして、台紙に貼り付けて作成した。それに山内がみずからの手で説明を書き入れていったのである。模型写真は佐藤達夫のネガが残っているので、手伝った可能性がある。1961（昭和 36）年 3 月 30 日に出来上がり、磯崎正彦が列車で京都に運んだのである。3 月 31 日に京都大学文学部に届けた。この時のことは佐原 眞が書き残している。

「1961 年 3 月 31 日、博士論文提出期限の夕刻、時間ぎりぎりに京都大学考古学教室へかけこんできたのも磯崎氏であった。彼が大事そうにかかえた風呂敷包の中には、山内先生の学位請求論文が入っていた」（佐原 1980）。

d 学位請求論文の審査

山内清男によって京都大学文学部に提出された学位請求論文は昭和 37 年度に京都大学文学部部長が指名した調査委員 有光教一・小葉田 淳・赤松俊秀らが審査した。

その結果はつぎのようなものである。謄写版印刷、B5判、縦書き36字・15行、7頁のものである。

「山内清男提出学位請求論文審査要旨

山内清男提出の学位請求論文『日本先史土器の縄紋』は、日本石器時代土器を特色づける縄紋の原体に関する研究である。本文は、前篇「縄紋原体の変化」と後篇「縄紋の総合的研究」とから成り、初めに研究史を中心とする序説を設け、末尾に縄紋原体とその圧痕との模型の写真を多数添える。また、本論文の資料となった縄紋土器の写真を集めて百二十四枚の図版を作り別冊とする。

「縄紋」は、日本石器時代のいわゆる縄紋土器に通有の紋様である。縄紋が土器の表面を何物かおさえた痕であることは早くから知られていたが、その原体については、次のような諸説があった。まず、「縄紋」という名称はEdward S.MorseのThe Shell Mounds of Omori, Japan (1897) にみえる cord mark の訳語として出発したが、しかし同書は、その原体が何物であつたかについて触れていない。その後、「縄紋」編物や織物の圧痕であるとの説が唱えられ、三宅米吉、坪井正五郎、中山平次郎、鳥居龍蔵、大山柏ら諸氏の支持を得て、長く続いた。しかし、別に、縄の側面の圧痕とみる説、あるいは、杉山寿栄男氏らが主張した袋あるいは網の如き立体的なものの圧痕であるとする説も行われた。本論文の著者は、序説において、以上の諸説を学史的に紹介するとともに、著者自身が、東北・関東をフィールドとして縄紋土器の研究を進め、その「縄紋」のなかで最も普通の斜行縄紋と呼ばれる種類について実験的研究を行うにいたつた経過を述べる。

斜行縄紋の多くは、土器の器面に斜の方向に条が並び、一見織物か蓆をおしたように見える。著者は、実験的研究を重ねているうちに、これが縄の回転した圧痕であることを発見した。そして「縄紋」は、原体である縄の形によつて、いろいろに変化することをあきらかにした。

前篇において、著者は、「縄紋」から復原し得た原体の種類について述べる。最も普通の斜行縄紋の原体は、二本の条がラセン状に巻きあつた縄である。時には三本、四本の条をラセン状に巻きあわせたものもある。それを土器の表面に回転すると、条の痕は斜に展開し、それを続ければ、斜行する条のあとがひろがる。ところが、その条に節をつけたものとつけないものがあり、その節の数によつてもちがつた斜行縄紋ができる。また、段、撚、条数によつて、縄の形が変るから、したがつて、「縄紋」の種類が多くなる。著者は「縄紋」、すなわち、土器面の縄の圧痕から原体の縄を識別して、単節斜縄紋・無節斜縄紋・複節斜縄紋等十一種にのぼる縄を復原し、解説する(前篇1)。ついで、それらの縄が、末端の形状、縄に附加された環と結節の形態によつて異なる「縄紋」となることを証明し、また、縄の周囲を別の縄で巻き絡げたものを原体とする「縄紋」があることをあきらかにする(前篇2)。また、「縄紋」から復原される組紐にh、三条の平組紐と四条の丸組紐があるが、前者は側面圧痕としてのみ現われ、後者は回転圧痕を示す(前篇3)。

以上の縄そのものを原体とする例とは別に、著者は、軸の周囲に条を巻き絡げものをもつて施紋した「縄紋」の存在を識別し、その原体を復原して、単軸絡条体と名づけるが、すべて六種類あるという(前篇4)。著者は、また、関東から東北にかけて分布する繊維土器の「縄紋」を検討し、数本乃至十数本の軸を使つてその上に平織物に条を絡げた原体を復原することに成功、多軸絡条体と呼ぶ(前篇5)。

縄に節や環をつける着想が押捺効果を高め、その効果をねらつて原体に工夫を加えるという相互関係が、以上のように多種多様の原体を生んだと著者は主張する。単軸絡条体と多軸絡条体についても同様である。それらの原体にあらわれる縄の撚り左撚り右撚りも、著者によれば、利き手の問題ではなく習性のちがひという。これらを総合した原体の形状が、縄紋土器分類の標識となり得ると主張する著者

は、縄紋土器を、早期・前期・中期・後期・晩期に分ち、九州・吉備・畿内・中部・関東・陸前・陸奥・北海道の各地方ごとにとりあげ、その可能性を示す（後篇1）。それには、なお、「縄紋」の原体がいかなる位置からどの方向に転がされたかを併せ考うべきであるとして、次のような事実を挙げる。すなわち、斜行縄紋のなかでは、原体を縦において横に転がす方法（横位—左右）が多く、前期と後期の大部分の型式の土器に認められる。原体を横におき上に転がす方法（縦位—上下）は、中部地方から東北地方にかけての中期に限られる。また、右撚りと左撚りの原体を用いた羽状縄紋は、関東北部では前期の前半、東北地方では後期から晩期にかけて行われたと（後篇2）。

また、著者は、縄紋と紋様の組み合わせによつて、地域と時期による変遷を確かめようとする。まず目につくのは、土器の外痕全面に縄紋を持つ型式が、陸前・陸奥・北海道では、早期から晩期まで継続していたのになら、関東では晩期になるとと絶えた。また、中部地方から西では前期と中期に行われたが、九州では全く出現しなかつた。次に著しいのは、いわゆる磨消縄紋の消長であろう。これは、中期後半に出現し後期に入ると九州から北海道まで普及した。そして、九州から関西地方にかけては、後期後半になると衰えたが、中部以東では晩期の終わりまで引き続き流行した（後篇3）。

最近の土器型式研究者は、早期よりも古い段階をあきらかにしつつある。そのうちには、縄紋を伴わぬものもあるが、関東以北では、縄紋を伴うものの発見が報告されている。著者は、それらを観察して、多くの縄紋が、縄の側面圧痕か単軸絡条体の側面圧痕であることを知り、土器の全面がその側面圧痕の带状配列で占められた事実を確かめた。これは、早期以後には全く見られない。また、縄の短い部分を列点状におした手法も、早期以後の縄紋式土器には認められない。しかし、著者は、それらの間に、回転縄紋が狭い範囲を限つて施された僅少の例を見出し、後の縄紋土器を特色づける回転押捺の萌芽であろうとする（後篇4）。

「縄紋」の原体については、明治以来多くの学者によつて論じられてきた。しかし、ほとんどみな皮相的な観察にもとづく解釈であつたため、定説とはなり得なかつた。本論文の功績は、ひとつには、著者が資料を厳密周到に検討した末、原体は縄であり、本格的「縄紋」はその回転押捺によるものであることをあきらかにしたことである。これについては、今や学界に異論をきかない。日本石器時代研究史上でな、かがやかしい業績と言わねばならない。本論文のもうひとつの特徴は、著者が、「縄紋」を単に技術上の問題として解明下にとどまらず、「縄紋」が縄紋土器の型式分類、年代の決定に有効な標識となり、ひいて日本先史時代文化の系統や変遷の究明に役立つべきことを論証した点にある。これが今後におけるこの方面の研究のひとつの行き方を示すものであることは疑いない。また、著者は、アルジェリア、サハラ、ナイジェリア、ウガンダなどの最古の土器に、縄を回転した「縄紋」があつて、日本と同様羽状縄紋もあることを指摘したり、北米、北欧、東欧、東亜のいわゆる縄蓆紋土器の施紋法が、わが縄紋土器のものと異なる所以をあきらかにするなど、これは、著者が広い視野に立つて研究を進めていることは明瞭である。

以上審査するところによつて、山内清男は文学博士の学位を与えられる資格があると認める。

昭和三十七年二月八日

京都大学文学部長 有賀鉄太郎

調 査 委 員

考古学講座担任 有 光 教 一
国史第一講座担任 小葉田 淳
国史第二講座担任 赤 松 俊 秀

」

これによって山内は1962（37年）3月31日、京都大学文学部から文学博士の学位が授与されたのである。

参考資料 1

山内清男の学位請求論文の目次

PAPYRUS NO 100 の原稿用紙

1 表 紙

2 目 次

3-102 I 序 説

1 縄紋の調査

2 縄紋の研究史

3 本研究の経過

II 前篇 縄紋原体の変化

0 縄と縄の記載に就いて

1 縄の圧痕 特に回轉による

2 縄の部分の變化

3 組紐

4 單軸絡條体

5 多軸單軸絡條体

III 後篇 縄紋の綜合的研究

1

2 裝飾としての回轉縄紋

3 紋様と縄紋

4 最古縄紋式土器に於ける縄紋

IV 摘要及び余説

模型寫眞（本冊に添付） 37 葉

圖 版（別 冊） 129 葉

註 1 は書き忘れのようである。纖維工芸としての縄 である。また、この表紙では縄はハエ縄で書かれていた。

参考資料 2

日本石器時代土器に於ける縄紋の研究

本 文

一、序説 日本石器時代土器研究の現段階（附録一参照）

日本石器時代土器に於ける縄紋

縄紋研究の歴史 自己の研究の課程

二、縄紋原体の復原

（Ⅰ）縄紋観察及復原の方法

撚紐製作法一般 （序説）

（Ⅱ）縄紋原体の分類

a、撚紐

b、撚紐に於ける局所的变化

c、撚紐の加工

d、組紐

e、単軸絡條

f、多軸絡條

g、その他

（Ⅲ）繊維工藝としての縄紋原体の意義、及その変遷

三、装飾の手法としての縄紋

（Ⅰ）土器製作及装飾に於ける縄紋押捺の占める位置

（Ⅱ）側面押捺の手法一般

（Ⅲ）回轉押捺の手法一般

（Ⅳ）装飾手法としての縄紋の意義及その変遷

四、結論 縄紋の本態 縄紋の起源の問題

縄紋の変遷 日本石器時代土器に於ける縄紋の特殊性

註記

資料発見地一覧

図版説明

附録

一、日本石器時代の年代区分、その方法及び私案

二、回轉押型紋の研究

本文中挿入図

凸版、網版 約二十頁分

コロタイプ 約十葉分

◎圖版

コロタイプ 約百五十葉

3 『日本先史土器の縄紋』の刊行と塚田 光

a 山内清男の博士論文の刊行と先史考古学資料をめぐる動向

山内清男は生前学位論文を刊行することを考えていて、柏屋印刷所に印刷費用の見積もりをしてもらったことがある。おそらく700万乃至800万という金額であったと思われる。到底準備できる金額ではなかつ

た。山内は1970年8月29日に東京都世田谷区の日産玉川病院で逝去された。山内みずからが学位論文を印刷・刊行することはできなくなった。山内家から山内清男・先史考古学論文集の刊行を委嘱されていた佐藤達夫の手にゆだねられることになった。しかし、山内の蔵書と縄紋土器などの考古学資料を成城大学に置いておけなくなり、1975（昭和50）年に佐藤・岡本東三らが大学から茨城県那珂湊市在住の藤本弥城の斡旋で土地の素封家の所有する土蔵に運びこまれた。こうした動きの背景に筆者は佐藤が脳に病を得ていて、自覚して山内の蔵書と縄紋土器などの考古学資料をどうしたら良いか、思案していたと推測している。結局、山内清男・先史考古学論文集を2冊刊行したが、佐藤は1977（昭和52）年4月7日に亡くなられた。山内の学位論文は刊行することができなくなった。

その後、佐原 眞が坪井清足と山内家を訪問している。山内の学位論文の出版・刊行を願いに出たのである。山内夫人清子は丁重に断ったという。この判断は適切であったといえる。佐原は山内の学位論文にない事例を書き入れる危険性があったからである。本来の形で刊行されていなければ、縄紋研究が正しくすすめられなくなった可能性があったからである。これ以後、山内の学位論文の印刷・刊行の動きはなくなった。

b 塚田 光と柏屋印刷所

塚田 光の人となりと履歴について

ここでは塚田の印刷屋としての側面を重視するので、考古学研究・下総考古学研究会・文化財保護運動などのことについて触れることはしない。お断りしておきます。

塚田は独自の道徳観・倫理観をもっていて、それに反する人に対してはきびしく許容しなかった。塚田に接した人は、印刷屋として経営者で営業を担当する姿を見ているために、このことに気づくものは全くないといえる。両親を敬い、兄弟が仲良く付き合うのは当たり前のこととしていた。そのため何らかの記念日、例えば誕生日とか、進学祝とか、などの集まりを企画し、会場を設定し、式次第を考え、費用も工面されていた。世間一般の良識では認められない行為をやらかす人にはことにきびしかった。このことを理解しないと彼の行動を分かることができないのである。

塚田 光 は1934（昭和9）年3月26日塚田 秀とキクの長男として東京市牛込区弁天町108番地で生まれる。6歳の時に東京市牛込区立早稲田小学校に入学。1944（昭和19）年群馬県荒砥村に疎開する。1946（昭和21）年4月群馬県荒砥村立中学校に入学。この頃考古学に関心を持ったという。おそらくこの頃溪流釣りを覚えたと思われる。1949（昭和24）年4月群馬県立前橋高等学校に入学。1952（昭和27）年3月同校卒業。4月に明治大学文学部史学地理学科考古学講座に入学する。1955（昭和30）年夏の神奈川県横浜市南堀貝塚の発掘調査がおこなわれる。これに参加する。その経緯はつぎのようなことであった。「発掘に先立つ6月に、和島誠一先生が明治大学考古学研究室に杉原莊介先生をたずねてこれ、学生その他の応援・協力をお願いしていた。丁度その場に居合わせた塚田氏は卒業論文で縄紋時代竪穴住居址をやることになっていたの、ぜひ参加させてほしいと和島先生に早速お願いした。するとぜひ来てほしいといわれて、参加することになった。これが和島先生との初めての出会いであった。」と。卒業論文作成のために、山内清男が発掘した竪穴住居址の件で、この年の秋、東京大学理学部人類学教室にたずねた。そしたら山内がけんもほろほろのいかりで取り付く閑もない状態で追い返されたという。山内清男は和島誠一が発掘する南堀貝塚発掘のようすが知りたくて、参加していた国学院大学の学生に帰る時に報告に来るように依頼していたのである。「南堀貝塚の竪穴住居址は黒浜期から諸磯a期にかけて築かれたものである。その住居址から出る土器に繊維を含有しながら諸磯a式土器の文様をもつものがあつた。塚田氏はこれらの土器が山内博士の黒

浜式にも諸磯 a 式にも分類できないことから、茶化したような発言をしたそうである。」(武井 1982) このことを発掘に参加した学生が山内にご注進したのである。このような初対面の人間に頭ごなしに怒鳴りつける行為は前に述べた、塚田の道德観・倫理観から許されることではなかったのである。1956 (昭和 31) 3 月に明治大学文学部史学地理学科考古学講座を卒業した。卒論は『縄文時代竪穴住居址の研究』である (塚田 1982)。

この年の 4 月に、明治大学大学院修士課程にすすんだ。しかし、1957 (昭和 32) 年 6 月明治大学大学院修士課程を中途退学した。これは杉原荘介が塚田と同窓の女子学生に今日いわれるパワハラ行為があった事実を知ったためである。このような教員の指導する大学には居られないと判断しての行動であった。みずから研究者の道を閉ざしたのである。家業の印刷屋を継いだ。彼のご両親は家を継いでくれとは一度も言ったことはないと言われ続けていた。1958 年同人誌『考古学手帖』の創刊、刊行に加わる。編集もされていた。1960 (昭和 35) 年に明治大学の杉原荘介が新しい雑誌『考古学集刊』を出すので統合しないかの申し入れがあった。この時、渡辺兼庸は賛成している。塚田は『考古学手帖』の独立と自主をいい反対した。そして、その編集から離れたのである。この時の話し合いについて、岡本 勇が追悼文の中で触れている (岡本 1982)。もはや渡辺は塚田にとって親友ではなく、ただの友達にすぎない存在になったのである。1962 (昭和 37) 年に岡本勇と「栃木県・藤岡貝塚の調査」を『考古学集刊』に書いている。この文章の最後には縄文時代前期の竪穴住居址の変遷について述べ、図も用意されていた。しかし、編集の都合で杉原荘介はそれらを断りもなく勝手に削除した。塚田は岡本に「二度と杉原の編集する雑誌には書きたくない」と話したと筆者に語っていた。さらに、1965 (昭和 40) 年 7 月に『日本の考古学 II 縄文時代』が刊行された。この企画段階では和島と岡本は「住居と集落」の項目の執筆に塚田 光で考えていた。しかし、杉原が「塚田は印刷屋で研究者でない。麻生優にしろ」という発言があり、実現しなかった事実がある。

和島誠一とのかかわり

塚田と和島誠一の出会については、前に述べてあるので略します。塚田は、神奈川県横浜市南堀貝塚の発掘以後、可能な限り和島誠一の発掘調査に参加している。横浜市市ヶ尾横穴群の発掘・同市磯子区三殿台遺跡の全面発掘などである。基本的に本業の印刷屋の仕事がない土曜日と日曜日に参加されていた。

和島誠一の人柄は、どのような人でも思想や信条がちがう人でも一人の人間として接して、その人の話をよく聞き、対応してくれるものであった。特に年が若い者については、丁寧な対応であった。筆者には次のような思い出がある。

筆者が高校生の時であったから 1960 年代中ごろのことである。いま静岡県沼津市で瀬戸物屋をやっている須磨 満と資源科学研究所の和島研究室にいたことがある。和島が用事を終えて、出てこられた。僕らの顔を見ると「今日は良いものをいただいた。ご馳走しよう」といわれて、お茶の「玉露」の袋を見せてくれました。薬缶でお湯を沸かし始めた。沸騰すると、適切な温度にさまして、入れてくれました。一煎、二煎、三煎と茶碗に注いでくれました。一通りのいれ方で味あわせていただいた。お茶の味わい方をお教えいただいたのです。居合わせた人にささやかな幸を分けていただいた気持ちになったのを覚えている。

中村嘉男も和島の人柄について「二切れのパン」という文を書いている。「1960 年代の初期前後であったと思う。資源研あのおなじみの古びたトースターがあり、和島先生の昼食は、その頃はいつも食パンであった。1960 年代後半になればいつも半片かそのくらいの食パンがあったが、当時は、先生は、つつまじやかな生活をされ、昼食には二切れのパンがあるだけであった。昼食時にたまたま資源研へ行くと誰にでも、その二切れのパンの一切れをすすめ、どうだ食べないかと言われた。自分の食事の

半分を人にすすめる人がいるだろうか、その頃資源研に出入りされていた人ならば何回も経験があることであろう。その一切れのパンいただいてしまったこともある。今から思えばずいぶん悪いことをしたと思う。ここにあげたのは、ほんの一例で、和島先生は名もなき学生や勤労者にだれかれの区別なく暖かい人間愛のこもった配慮をされた」(中村 1972)。和島誠一の学問的な評価をしなければならないが、考古学資料を基礎とした歴史科学者のためにかなり準備が必要である。課題としておきたい。

塚田がことに深く和島誠一を意識してつきあい出したと思われる時がある。1967(昭和42)年10月15日に甲野勇が亡くなられた。和島は甲野が勤めていた国立音楽大学の後任に塚田を推薦していた。彼は前に述べた事情で丁重に断った。これ以後、より一層いろいろなことをよく相談するようになった。

山内清男に対する塚田 光の基本的姿勢

塚田 光は1966(昭和41)年3月1日「縄文時代の共同体」を発表する。特集 原始古代集落の構造の中の一つとして書かれている。本人いわく「テーマに真面目に取り組んだのは僕だけだった」と。和島誠一の「農耕・牧畜発生以前の原始共同体」(和島 1962)を玩味熟読して、書いている。縄文時代の竪穴住居址と集落址の実例を検討した上「前期・中期の小家族数戸で構成される共同体の要素は、後期になっても竪穴住居址の構造が示す限りでは、質的な変化はみとめられない。したがって、共同体内での人口の増加は、必然的に`家、の増加=共同体の規模の拡大となろう。しかし、この時期には大貝塚と共に、小遺跡もそれ以上に多数存在している。こうした事象を、共同体の拡大と共に一部の分離・分散として理解するか、あるいは大貝塚を拠点とする共同体の季節的な離散・集合とみなすか、いずれにせよ、後・晩期の共同体の解明には資料が少ない」としている。その上で「縄文時代の共同体について、一集落の範囲内でわずかな手がかりを求めたにすぎないが、これはさらに一型式の土器の分布圏との関連において理解されなければならない。「土器の地方型の存在状態は、住民数百人(時に数十人から千人以上)の人員からなる多数の部族に分かたれ、その若干が同一の土器型式を用いるということ想像すれば理解しやすいであろう。あるいは民族を言語学的群に分かつことにもにている……」という、土器の地域性について、示唆に富んだ見解がある。共同体の解明という見地から土器一型式によって時期と地域を限定された多くの集落を一つの胞族として理解するには、なお多岐にわたる研究と証明が必要であろう」と述べている。

この論文が発表されると間もなく山内清男から「画竜点睛 上・下」が送られてきた。続いて山内が書いたものが送付してくるようになった。このことは塚田みずから筆者に語ったのである。山内が『考古学研究』を購読しておらず、塚田に借用に来たことは下総考古学研究会の「研究メモ」145に岩崎道雄が書いている(岩崎 1978)。

塚田がもっとも嫌う事実を確かめせずにものをいう例である。

塚田は山内清男には印刷屋として接していた。山内の先史考古学における業績が日本考古学界に重要であることは理解していた。しかし、人間性に対しては彼の許しえないものであったのは事実であった。

塚田はある時つぎのようなことを筆者に話してくれた。山内清男・先史考古学論文集が出版されると印刷費の請求にうかがうことになる。凸版の価格が示されていると、考古学の本を出してきて、これ持っているかと尋ねられ、凸版の額でゆずるといふ。その数が2、3あることもあった。印刷代は印刷所の請求なので、出された本の代金は自分の小遣いで支払うことになる。限られた小遣いだったのでつらかった、と話していた。

また、印刷屋からすると山内は良い依頼人ではなかった。山内清男・先史考古学論文集を一冊に製本すると、きちんとした版面でなく、活字のポイントを落し、分量を詰め込んでいる部分がかかなりある。組みかえ

がおこなわれていたのである。塚田のことだから組みかえの代金は請求しなかったと思われる。

塚田 光 と 柏屋印刷所

日本の印刷業界では1970年代末頃から鉛の問題がおきてきた。一方、新しい印刷技術が普及してきた。こうした動向を鋭敏に受けとめた塚田は父 秀とつぎのことをはかった。活版印刷の職人の雇用問題と新しく出てきたオフセット印刷などの人・機械・技術などについて調査研究する必要がある、と。そのために費用200万円を組んだのである。

また柏屋印刷所も敗戦前からの木造建物で老朽化がすすんでいた。新しいビルとして建てかえることが考えられた。建築業者に印刷の作業場と住居をあわせた5階建てのビルの設計・施工について見積もりを依頼した。筆者の高校時代の友人でビルの建築事務所をしているものに聞いたところ当時2、3億円はかかるだろうと教えてくれた。費用は銀行からの借入れで当てることを決めている。銀行は土地と秀の有価証券を担保に融資を決めた。この時、塚田 光は山内清男の学位論文の出版費用には筆者が推測するに一千万円の融資を銀行に申し入れた。銀行ははじめ否定的であった。しかし、秀が身元保証人になることで融資することが決まった。山内清男の学位論文の出版費用が調達できたのである。

c 『日本先史土器の縄紋』の刊行

山内の学位論文の出版費用は用意できた。しかし、山内家の了解が必要である。ことは簡単でなかった。塚田がめずらしく愚痴をこぼしていたのである。塚田の突然の申し出に山内家の拒否反応が返ってきたのである。出版人の意気込みで慎重にことに当たったようである。何とか、説得して出版の了解をえた塚田は、山内清男の学位論文『日本先史土器の縄紋』の編集に取りかかるのである。

1979（昭和54）年6月3日に作業を開始した。まず本文の組版のための編集作業。提出した論文と同じ原稿が使われたのであろう。これはかなり早く組版がされて、校正がでた。この時、塚田は活版では縄紋の撚りをしめす記号の鋳造に手間がかかるだろうといわれていた。つぎに図版のなかの模型写真の編集と製版のための原稿づくりである。模型写真1-35の図版の編集・原稿作成がおこなわれた。つづいて図版1-61、図版62-108、図版109-124の編集と原稿作成がなされた。こうした中、7月3日武井に山内清男の学位論文『日本先史土器の縄紋』の編集をおこなっているけど協力してくれないかと要請があった。承諾をすぐにした。それから1週間後に柏屋印刷所にうかがい、山内清男の日本先史土器の縄紋研究の資料を受け取った。編集作業はかなり早い調子ですすめられた。

学位論文の本文に引用されている Reallexikon der Vorgeschichte は東洋文庫に所蔵されていることが分かり、筆者が校正のために何度か、通った。図版写真では余分がないものが数点あり、複写をした。これには横浜市港北ニュータウン文化財調査団で写真を担当していた今は亡き寿福 滋が援助してくれた。

かくして山内清男の学位論文『日本先史土器の縄紋』は1979（昭和54）年11月15日に刊行された。その販売の日には柏屋印刷所のまわりを考古学研究者や学生が取り囲んだという。年内には品切れになったのである。

山内清男の『日本先史土器の縄紋』を刊行し、1980（昭和55）年3月までに印刷にかかった諸方などを清算し終えた。塚田は山内家に印税を用意した。しかし、山内家は固辞した。そのため塚田は山内清男の先史考古学の研究のための研究会をつくり、その運営のために使わせてもらうことにした。新社屋の整備などの雑務を片づけた。そして、1981（昭和56）年にはいり、研究会活動にとりくんだ。

しかし、1981（昭和56）年3月25日に心不全のために両親にみとられて、亡くなられた。

疾風怒濤の活動をして塚田 光はこの世を去っていた。いろいろなことを書きのこさなければいけないと
思っている。

引用・参考文献

- 穴澤味光 1997 梅原末治論 付 梅原末治博士略年譜 角田文衛編『考古学京都学派<増補>』 218-
299 雄山閣
- 伊東信雄 1982 回想 仙台の考古学 『仙臺郷土研究』復刊第6巻第2号 2-12 仙臺郷土研究会
- 岩崎道雄 1978 『研究メモ』145 覚書山内先生の縄文講義 10 下総考古学研究会
- 岡本 勇・塚田 光 1962 栃木県・藤岡貝塚の調査 『考古学集刊』第4冊、21-37、東京考古学会
- 岡本 勇 1981 塚田 光君と『考古学手帖』のことなど 『貝塚』28 10-13 物質文化研究会
- 鎌木義昌編 1964 『日本の考古学 II 縄文時代』 河出書房新社
- 甲野 勇 1957 縄文土器のはなし 総237頁 世界社
- 佐原 眞 1980 特論-縄文施文法入門 『縄文土器大観』4 後期 162-167
- 武井則道 1979 遺跡群研究序説(前) 『調査研究集録』第4冊 1-50 港北ニュータウン文化財調査団
- 塚田 光 1982 『縄文時代竪穴住居址の研究』『縄文時代の基礎研究』
- 中村嘉男 1972 二切れのパン 『港北のむかし』21 5・6 港北ニュータウン文化財調査団
- 松本彦七郎 1932a 宮戸島及瀬澤介塚の土器 附特に土器紋様論 『現代之科學』第7巻第5號 10-42
現代之科學社
- 1932b 宮戸島及瀬澤介塚の土器 附特に土器紋様論(二) 『現代之科學』第7巻第6號
20-48 現代之科學社
- 三森定男 1970 考古学太平記その二 『古代文化』第42巻第1号 平安博物館
- 山内清男 1925 磐城国三貫地貝塚発見の土器の捩糸紋 『人類学雑誌』第40巻第2号 東京人類学会
- 山内清男 1930 斜行縄紋に関する二三の観察 『史前学雑誌』第2巻第3号 13-25 史前学会
- 和島誠一 1962 農耕・牧畜以前の原始共同体 『古代史講座 2 原始社会の解体』1-16 学生社
- 渡辺兼庸 1982 山内先生と4人の人たち 中村五郎編『画竜点睛』118-122 山内先生没後25年記念論
文集刊行会
- Eberut Reallexikon der Vorgeschichte 1920-1932
- Edward S. Morse The Shell Mounds of Omori, Japan 1897
- MATSUMOTO,H 1920 Notes on the Stone Age People of Japan. *American Anthropologist*. vol. 23, No. 1.
50-76

[元横浜市歴史博物館学芸員]